

支笏湖ゼロカーボンパーク

支笏湖の美しい自然環境を後世につなげるよう



ゼロカーボンパークとは

環境省では、国立公園において先行して脱炭素化に取り組むエリアを「ゼロカーボンパーク」として推進しています。

国立公園における電気自動車などの活用、国立公園に立地する利用施設における再生可能エネルギーの活用、地産地消などの取り組みを進めることで、国立公園の脱炭素化を目指すとともに、脱プラスチックも含めて持続可能な観光地づくりを実現していくエリアです。

登録の経緯

支笏湖は、透明度が高く、日本の湖沼でトップクラスの水質を誇ります。この理由としては、水深が360mのカルデラ湖であり、湖岸を森林が囲み、流入する河川や土砂が少ないこと、このためプランクトンの発生が少ない貧栄養湖であることが挙げられます。

こうした自然条件以外にも、平成18年には、エンジン付きボートの乗り入れ規制、令和4年には、支笏湖の大自然を安全に楽しく利用していただくための《支笏湖ルール》を策定するなど、地域住民や事業者、環境省、市が連携して支笏湖の水や自然を守っています。

支笏湖地区では、長年にわたり、このような環境保全活動と、自然に調和したアクティビティ（体験活動）や水濤まつりなど、《環境と観光が共生した取り組み》を続けています。

また、《支笏湖地区の電力》は、おもに水力発電でまかなわれており、全国の国立公園でも希少な電力ゼロカーボン地域です。

《環境と観光が共生した取り組み》

- ①再生可能エネルギーの活用
水力発電の電力を活用した電動自転車とカヌーにより、支笏湖から新千歳空港まで移動する「ゼロカーボンアクティビティ」を実施しています。
- ②二次交通の脱炭素化
国立公園内にあるビジターセンターで電動自転車の貸し出しやEVスタンドを設置するなど、地域全体での脱炭素化を推進しています。
- ③環境配慮型アクティビティの推進
カヌーやダイビングを楽しみながらゴミ拾いを行う活動などを行っています。
- ④サステナブル（持続可能）な観光地づくり
「支笏湖水濤まつり」の氷像の骨組に、国立公園内の間伐材を活用するなど、環境に配慮したイベントを開催しています。



《支笏湖地区の電力》

王子製紙千歳第一発電所は、水明郷に位置する水力発電所です。苫小牧の製紙工場の電力供給を目的として明治43年から発電を開始しています。現役の産業用発電所としては最古のものであり、平成19年度には土木学会選奨土木遺産と経済産業省の近代化産業遺産群として選定されています。発電された電力の一部は支笏湖地域に送電され、地域生活を支えているほか、平成30年の胆振東部地震では、全道でブラックアウトになる中、支笏湖地区は水力発電により多くの世帯が停電を免れており、災害への対応力強化にもつながっています。



《今後に向けて》

支笏湖の美しい自然環境は、地域の住民や事業者、環境省、市による取り組みによって長年守られてきました。こうした中、近年、地球温暖化の影響とみられる自然災害が国内外で頻発し、今後、そのリスクがさらに高まることが予想されており、地球温暖化対策は世界における喫緊の課題となっています。市は、2050年、カーボンニュートラルの取り組みの一環として、支笏湖の美しい自然環境を後世につなげるため、再生可能エネルギーの活用や環境に配慮した体験活動の推進、支笏湖版脱炭素シナリオ《支笏湖スタイル》の構築・展開など、支笏湖ならではのゼロカーボンパークとしての取り組みを進めていきます。

地域の声



一般社団法人
国立公園 支笏湖運営協議会
専務理事
白石 一人 さん

支笏湖の環境を守るため、地域では動力船の乗り入れ規制や支笏湖ルールの策定など、様々な取り組みを行ってきました。令和4年3月のゼロカーボンパーク登録に伴い、ゼロカーボンパークにふさわしい支笏湖ならではの脱炭素や持続可能な観光地づくりに関係する取り組みの指針である《支笏湖スタイル》の構築に向け、協議会を中心に地域が一体となって検討を行っています。

令和4年度には、事業者からのヒアリングや運用方法、管理方法の検討を行うとともに、ごみ拾いダイビングや電動自転車の貸し出し、水濤まつりでの間伐材の活用など、持続可能な観光コンテンツ実証を行いました。今後は、地域住民や事業者各々、皆が参加できる持続可能な活動を次世代へ伝える基盤を構築していきたいと考えています。

地域が一体となって支笏湖の素晴らしい環境をさらに磨きあげることに加え、環境維持や改善等につながる観光コンテンツの提供により支笏湖を訪れた方の環境意識を高めることで、次の10年後も楽しめる環境と共生する観光地となることを期待しています。



環境省 北海道地方環境事務所
支笏洞爺国立公園管理事務所
所長
千田 ともき さん

国立公園の支笏湖エリアは1949年5月に国立公園に指定されてから、地域の皆さんのご尽力によって、豊かな自然があまりのままで残されています。ゼロカーボンパークの登録を契機に、これまで以上に脱炭素化への意識が高まり、支笏湖版脱炭素シナリオとなる《支笏湖スタイル》の検討や、事業者による環境に配慮した取り組みが地域全体で進むことを期待しています。

環境省では支笏湖ビジターセンターをはじめ、公衆トイレ、駐車場、湖畔園地、モラップキャンプ場などにおいて、脱炭素化やLED化などの省エネ改修や電気自動車（EV）充電器の設置などを先行的に進めました。登録後も支笏湖ビジターセンターにおいて、太陽光パネルと蓄電池の設置や、灯油ボイラーの撤去、地中熱ヒートポンプの導入により、年間約1万リットルの灯油の削減と再生可能エネルギー100%を達成しています。

また、EV充電器を支笏湖温泉に3基、モラップに1基導入しています。

これら環境省の取り組みが、千歳市のカーボンニュートラルのひとつの象徴となれば幸いです。